「横山氏」の話を聞き，夜のミーティングで語り合い，自分のテーマでレポートにまとめることを通して学生たちにも「力強さ」が見えてきている。「書物で分かったこと」「体験してかかわって分かったこと」この双方向のたゆまぬ運動が学生たちをたしかなものに導いてくれるのだと信じている。

以下に３人の学生のレポートを紹介するのでキャンプ，そしてどんぐり牧場の一端を感じ取っていただければ幸いである。

私たちのために「特別の仕事」をアレンジしていてくれたり，その仕事を最後の班で完成させるように手配をしてもらったりとボランティアのつもりがかえって気を使わせてしまったことに心が痛むが，このような心意気が学生とのつながりを支えたのだろうと思われた。どんぐり牧場のたくさんの配慮と好意とに感謝しつつ…

（ふくやま　せいぞう
本学コミュニティ福祉学部教授）

＜学生レポート１＞

ワークキャンプ（inどんぐり牧場）を通して

コミュニティ福祉学部
２年　相原　耕平

今回，フィールドスタディで夏休みにどんぐり牧場へと行ったわけだが，そこでは普段出来ないような様々な経験をすることが出来たと思う。それまでちょっとしたボランティアの経験しかなくワークキャンプなどやったこともない私にとって，この３日間はなかなかに刺激的なものだった。ここでは，どんぐり牧場で得たもの・かんじたものをもう少し深く掘り下げてみることにする。それによって，そこでの経験をより確かな形に出来ればと考えている。

どんぐり牧場に行ってから考えたこと

私はどんぐり牧場を，農業による共生集団だと捉えた。それは，そこの方達が各自の能力を出し合って，一緒になって生活を営んでいるように見えたからである。都会の生活に比べれば，決して楽とは言えない。しかし，私は（３日間ではあるが）実際にそこでの生活を体験してみて，言いようのない充実感を覚えた。自分のしていることが他の人たちの役に立っているという一種の満足感があって，何と言うのか，都会の生活よりも無為なことが少ない自分が生きているということを実感し

ている気がしたのである。

私はどんぐり牧場のような共同体の必要性について考えてみたい。私がワークキャンプの前に見た資料には，どんぐり牧場は「農業協働生活集団」とされていた。これは私には初めて聞く言葉だったし，おそらく日本ではほとんど存在しないのではないかと思われる。私はこのどんぐり牧場と一般の施設を比べて，障害者の自立の援助には，やはりどんぐり牧場の方が理にかなっているように思う。

それはまず，ここが個々人の人格を尊重しているからである。必ずしも一般の施設が悪いというわけではないが，あくまで援助の対象であるという感覚が拭いきれない施設よりは，少人数の共同生活によって一人一人の存在が重要になってくるどんぐり牧場の方がはるかに障害者の地位は確立されていると言える。むしろ，ここでは障害のある・なしは私が考える程大きなことではないのかもしれない。実際，ワークキャンプで初めて作業をした私よりも彼らの方が（経験の差を考慮しても）はるかに熟練しているように見えた。それはだれでも働けるということの証明だと思うし，障害はあまり障害とはならないように思う。次に，個々人に仕事と責任を与えていることがあると思う。人間は成長するにしたがって少しずつ親や社会から責任を与えられていくものであり，それによってその人は自分が信頼されていることに自信を得て，自己をより深く形成して自覚も育っていくものである。それは障害のある人にとっても同じことで，彼らだって社会から何らかの責任を与えられればそれに対応してより多面的な成長をしていくはずである。農業を通して自分の仕事に自信と責任を持つことは，障害者を援助の対象としてしか捉えられない施設では得られないものであろう。そして，どんぐり牧場が経済的に自活できていることも大きいように思う。公的な補助をほとんど必要としないことで，行政等に縛られず自由な事業を展開することが出来るわけで，これは公的補助によって束縛を受けて独自性を発揮しづらい施設よりも優れている点であると感じる。また，（これは財政的な面とは直接関係無いかもしれないが）自分たちが育てた作物によってたくさんの収入を得ることは，それだけ自分たちの仕事に価値があるということを表し，かれらにとってはより大きな励み，いわば達成感・充実感を得ることになるのではないかと思う。

それらは，ひとえに家族のように生活していることによるのではないのだろうか。施設では（場所にもよるだろうが），個々の障害者はたくさんの援助対象の人がいる中での１人としてしか見られていないと思う。そのような環境でいわゆる健常者と障害者の互いが強く結びつくことは非常に難しいような気がする。どんぐり牧場は，少人数ということを差し引いても，仕事の中でお互いの結びつきは強くなっていて，それが家族形成という点で大きな役割

を果たしているのだろう。

したがって，私はどんぐり牧場のようなところがもっと増えていくことが望ましいのではないかと考えるのである。

最後に，障害者が老後を迎えることについて考えてみる。横山さんが「どんぐり牧場でもかなり齢を重ねて既に家族がいない人もいる」と話されていたが，確かに何十年もやっていればやがてはそういう状況が起こることになるだろう。その時にどのような方策が取れるのか。私は，（個人を尊重する政策を取ってきたという前提の下でだが）やはりそれまでと同じように，つまり他の高齢者がそうである（そう望む）ように，その人の尊厳を守る形で介護・支援をしていくことが最もよいのではないかと思う。それは様々な面で可能である。行政組織・制度の面から言えば，社会保障制度を整備して各種年金・医療保険を利用者に低負担で提供することであるだろうし，人的な面から言えば，地域ぐるみ・共同体内での助け合いや地域住民各々の自己変革が求められることになるだろう。例えばスウェーデンでは，福祉は市・医療は県とそれぞれで役割分担をして，その下で地方自治体が責任を負う形をとっている。そして法律もノーマリゼーションや人格の尊重といったことを根底に置いたものとなっている。日本もこれにならえとは言わないが，少なくとも，もう少し障害を持つ高齢者の暮らしやすい環境を整えることは出来るはずである。

どんぐり牧場での感想

感想ではあるが，ここで改めて思い起こすよりも実際その時に自分が感じたことを載せた方が正確だと思うので，ここでは作業メモと私の日記を再構成して載せることにする。あまり内容は無いかもしれないが，そこは勘弁していただきたい。

8月10日（木）

今回，初めてちゃんとした（農）作業をすることもあり，一体どんなことをするのかと期待と不安が入り混じった気持ちだったが，実際にやってみて本当に疲れたというのが正直なところだった。作業自体は単調な繰り返しなのだが，その一つ一つが私にとっては重労働だった。普段は絶対にしないようなブロック積み(生コン混ぜなど)は，終わってみて「よく体力が持った」と自分でも思う。しかし，最後の方はあまり動きたくないとさえ思ってしまったことを考えると，実際は限界までいっていたのかもしれない。筋肉が笑っていたし，手のひらも痛くなっていた。ここでは養鶏の肥料として最上のものを使っているということだったが，トラックで運ばれてきた魚粉を見て，その量の多さに驚いた。考えてみれば当然のことなのだろうが，その時は「本当にこれだけのものを使うの？」と感じた。

8月11日（金）

5：40起床で6時から草取り。朝から動くのは楽ではないが，ある程度は生活として慣れていることなので特別つらいということも無かった。昨日以上に力仕事が多く，非常にしんどかった。握力が無くなっていたし腰も痛くなっていた。それでも昨日と比べると少しは慣れてきたのか，（昨日よりは）キツイと感じることは少なかった。午後は作業の間，ずっと汗をかきっ放しで，働いていると（自己満足に近いが）実感した。

8月12日（土）

午前・午後ともじゃがいも堀り，初めての農作業で一昨日・昨日の作業と比べると格段に楽だった。しかし，作業自体は単純だったが，連日の土木作業で腰は痛いし左手も豆などがあって痛く，それなりに大変だった。

この3日間，暑い（？）太陽の下（自分なりに）精一杯働いたが，それは何とも得難い経験をもたらしてくれた。“共生社会”という言葉でくくれるものかどうかは分からないが，これこそがコミュニティ“ムラ”なのではと感じる。共通の目標の下に各々が自分自身のノルマを決めて作業する，そこには差別も競争もないわけで，福祉の原点だというのもよくわかる。

夜明けとともに仕事を始め，日暮れとともに仕事を終える，そんなどんぐり牧場の生活を素晴らしく感じた3日間だった。

終わりに

全体を通して，どんぐり牧場の考え方に共鳴することが多かった。この農業共同体の助け合いの中での自立・自活生活は，障害を持つ人も持たない人も同じ環境のもとでともに生きることが出来るということを見事に表していたと思う。そして，農業によって小集団（別に外部交流を持たないという意味ではない）で生活することは，競争の原理を排除し差別化のない社会を築く効果をもたらしているように見える。繰り返しになるかもしれないが，こういった概念を持つ施設（もしくは団体・共同体）の輪がもっと広がっていけばと思う。

参考文献：

「共生福祉論」吉本充賜，ミネルヴァ書房，1987

「新スウェーデンの高齢者福祉最前線」奥村芳孝，筒井書房，2000

＊これらの文献は，あくまで私の論旨の上で参考にしたものです。